

岩崎漢一郎

月と
狂言師



月と狂言師



谷崎潤一郎著



月と狂言師昭和二十五年三月十五日初版印刷昭和二十五年三月二十日
初版發行著者谷崎潤一郎發行者東京都千代田區丸ノ内二ノ二栗本和夫
印刷者東京都新宿區市ヶ谷加賀町一ノ一二大日本印刷株式會社小坂孟
發行所東京都千代田區丸ノ内丸ノ内ビルディング五九二區中央公論社
電話丸ノ内(23)五三五番五三六番五三七番五三八番振替口座東京三四番

定價四百五十圓

目次

月と狂言師	一
雪	三九
所謂痴呆の藝術について	七〇
同窓の人々	一二二
磯田多佳女のこと	一五〇
「潺湲亭」のことその他	二二二
客ぎらひ	二四二
疎開日記	二六二

挿圖目次

著者像	内田 巖筆	卷頭
大友附近の圖	菅 楯彦筆	一五八
多佳女宛淺井忠氏書翰		一八〇
多佳女墨蹟		二〇〇
錢瘦鐵氏筆潺湲亭扁額		二三八

月と狂言師

考へれば早いもので、わたしたちが終戦を迎へてからことは既に三年になる。わたしがあの疎開先、作州の山の奥から京都へ出て來、此の洛東の白川のほとりに家らしいものを構へてからでもまる二年になんなんとするくらゐである。昔から京都は他國の者には住みにくい土地とされてをり、私もそれは承知の上で來たのであるが、さう云つても二年近くになるうちにはいつか町内にも顔馴染が出來、話のうまが合ふ人などもぽつぽつ此の邊に見つかるやうになつた。その第一は永觀堂の前の方に住む奥村富久子さん、そこへよく見える藥屋さんで狂

言師の武藤達三さん、——富久子さんは鈴鹿野風呂氏の門人で俳句をよくする一方、梅若猶義氏について能を學び、去年の秋は室町の金剛の舞臺で羽衣を、今年の春は舟辨慶を演じた人で、此の秋には觀世流の師範を許され、その披露として菊慈童と葵の上を演ずると云ふことであるが、まだ三十にも足らない若さで京都には珍しい女能樂師になる此の佳人のことについては他日改めて書く折があらう。それから南禪寺の塔頂聽松院にゐる山内さん、その夫人の京子さん、母堂の榮子さんなどの人々。此の一家の人たちは、今二條大橋の西詰に竹葉が旅館料理屋をしてゐる家、あの公卿屋敷か何ぞのやうな御殿造りの邸宅に數年前まで住んでゐたのださうであるが、戰爭中そこを人に讓つて此方へ移つたのであると云ふ。それと云ふのが、先代の主人が相場師として全盛を極めてゐた頃、今のお寺に庫裡を建て、寄進したと云ふ緣故があるからで、現に部屋借りをしてゐる座敷が昔寄進した建物の

一部なのであつた。私たちは、家に飼つてゐた熊と云ふ犬が聽松院へ紛れ込んで一箇月ほど山内さんの厄介になつてゐたことなどがあつて、だん／＼心やすくし出したのであるが、山内さんは部屋借りとは云つてもさう云ふ事情なのであるから、ひろい庫裡の中の幾室かを使つて、以前の邸宅に比べればこそ狭いけれども、幽邃な山内の、池をめぐらした前栽のけしきを獨占めにし、如意嶽あたりの遠山の眺めをほしいまゝにしながら、なまじな町家に住むよりはなか／＼ゆつくりと氣樂に暮してゐるのであつた。當主の山内正司さんは或る會社の重役をしてゐるとやらで、尺八の名手、夫人の京子さんはこれも富久子さんと同門の俳人である外に、仕舞、踊、笛、鼓等々の諸藝に達し、目下は地唄の三味線に凝つてゐる、母堂の榮子さんも京子さんに劣らぬ藝人で、近頃は茂山千五郎氏について狂言や小舞の稽古をしてゐる、と云つたやうな譯で、此の一家はもう昔のやうな豪華な生活はしてをらず、

閑雅な地域に世を侘びながらも、なほそのかみの嗜みを捨てずにゐるのであつた。

ところで私たちは、地唄が好きと云ふ點で山内さんと趣味を同じうするのみならず、昨今は又狂言の千五郎氏をもひそかに最眞にしてゐるのであつた。實際京都に住んでゐると、すぐれた歌舞伎芝居はたまにしか見られず、と云つて新劇や音樂會なども大阪までは來るけれども此處は素通りしてしまふので、見るに堪へるものと云つては結局能か狂言よりないのであるが、私たちはたび／＼見に行くうちに能よりも狂言の方が、分けても千五郎氏の藝が好きになつたのであつた。もちろん先代の千五郎、今の千作翁は東西を通じての巨人であり、尊敬に値する人だけでも、何と云つても八十を越えた高齢なので傷々しい感じがすることは免れず、その點千五郎氏は今が一番油が乗つてゐるやうに見える。私の妻はあの何處かフレッド・アステアに似てゐる顔

だち迄が好きで、私が内々狂言小唄や小舞を習ひたがつてゐることを知り、しきりに千五郎氏を招いて稽古するやうにすゝめたりした。そんな話がいつか千五郎氏の耳にも這入つたらしく、稽古して御覧になりませんか、富久子さんあたりを介して云つて來られたこともあり、山内さんから、千五郎さんの稽古のある日に見にいらつしやいと、何度も誘はれたことがあつたが、さて私にして見れば、正直のところ習ひたい氣はあるのだけれども、何分此の年では物覚えも悪くなつてゐようし、大阪の布施博士に血壓の治療を受けてゐる状態ではあるし、老人のたどくしい足もとで小舞などは思ひも寄らず、まあ習ふなら小唄だけなどであるけれども、それすら息がつゞくかどうかを先づ試して見る要があるので、妻が仕舞を教へて貰つてゐる富久子さんに「班女」のひとくさを授けてもらひ、それをときく謠つて見ると果して夥しい息切れがする始末であつた。そんな譯なので千五郎氏に

弟子入りするのも氣おくれがして、ぐづ／＼に日を送つてゐた折柄、来る九月十七日の十五夜に月見をかねて狂言と小舞の會をするからと云ふ案内があつて、謄寫版刷の番組が届いたのを見ると、南禪寺社中主催、茂山千五郎後援としてあり、會場はこれも南禪寺境内の、上田邸となつてゐた。私はまだ此の上田と云ふ人とは面識がないのであるが、何でも奥さんの千枝子さんと云ふ人が山内さんの母堂にすゝめられて千五郎氏に弟子入りしたのが始まりで、今では主人の龍之助氏も、小學校へ行つてゐる頑是ない子供たち迄も、狂言や小舞を習つてゐるとのことであつた。そしてその邸と云ふのは、南禪寺の塔頂の中でも林泉と建物の立派さで鳴つてゐる金地院の寺中にあるとやらで、池水や座敷の配置が月を賞でるのに最も好都合に出来てゐるとのことであつたし、もしも私が出席するなら、千作翁と千五郎氏とが特に一番づつ舞つてくれると云ふことでもあつたので、私は望外の仕合せを逸し

てはならじと、一も二もなく招きに應ずる旨を答へた。

それにつけても思ふことは、嘗て私たちは月見らしい月見をしたことがあつてからどのくらゐの年月を経たであらう。戦争中熱海西山の山莊で月を眺め、みんなみの遙けき海のたゝかひをおもひつゝ見る十五夜の月と云ふ腰折を詠んだ覚えはあるが、それは此の先日本の國や自分の身がどうなるかと云ふ不安に怯えつゝひとり大空に澄みわたる情ない月を歎いたので、格別憂ひを遣るよすがにはならなかつたし、心を慰める酒や肴があつたのでもなかつた。そのうち作州の僻地に逃れて田舎の町の料理屋の離れ座敷に住んでゐた頃、書齋にしてゐた二階の部屋の床脇の柱に、有人對月數歸期と云ふ辜鴻銘翁の聯を掲げてこゝでも矢張昔の流人のやうな氣持で配所の月を眺めたに過ぎなかつたが、終戦の年の翌年にやう／＼の思ひで京都へ出て來てからも、なかなか落ち着いて月を見るなどの餘裕はなかつた。さうかうするうち

今の家を手に入れて引き移つたのがその年の十二月のことで、春は平安神宮に、秋は永觀堂に近く、二階座敷が東山と差向ひであるのを喜び、我が庵は花の名所に五六丁紅葉に二丁月はゐながらなど、悦に入つたものであつたが、花は幸ひ今年で二度も望みを達したけれども、紅葉と月とはそれゝに障りがあつて思ひを遂げてゐないのであつたと云ふのは、紅葉は去年は色が悪くて永觀堂の庭も期待した程ではなかつたし、又十五夜には、和辻春樹氏夫妻や英國人のミツチエル氏（あの紅棒で有名なミツチエル家の一族であるとのこと）など、平安神宮の客殿を借りてさゝやかながら觀月のむしろを設けたのであつたが、まことに生憎な空模様で月は姿を現はさずになりました。それやこれやで私たちはことしの十五夜に早くから望みをかけ、當夜は何處に行くことにしようか、廣澤の池は、三井寺は、石山は、など、妻と話し合つてゐたところだつたのが、思ひがけなく山内さんの招待に接した

のであつた。たゞさうなると心配なのはお天氣で、去年のやうに曇らねばよいがと案じてゐると、折あしく十四五日からアイオン颱風とやらの警報が出、十六日から十七日へかけて近畿地方に上陸するかも知れないと云ふことだつたので、ことしも月には縁がないのかと半ば諦めてゐたところ、どうやら關東へ外れたらしく、埼玉方面が又してもひどく荒らされたと云ふことであつたが、京都は運よく十七日の朝から晴れて爽やかな秋空が覗き始め、後にはだん／＼ちぎれ雲の影も消えて行つた。ほんたうに今年の颱風ももう此の邊がおしまひであらう。これから一二箇月の間の京都は日本ぢゆうの何處よりも美しい天國と化し、月によろしく、茸狩によろしく、紅葉によろしく、一年ぢゆうで一番行樂に適する季節となるであらう。私も實は四月の花が散つてから、此の季節の到來するのを待ちこがれてゐたのであつた。で、その日は午後早々からと云ふことであつたが、皆さんがお待ちかねです

からと、催促の使があつたので、私は妻をうながして三時頃に出かけた。

金地院と云ふのは、瓢亭の方からインクラインに架してある橋を渡り、上田秋成の墓のある西福寺の前を通つて眞つ直ぐに行くと、南禪寺の勅使門に突き當る、その門の外の、蓮の生えてゐる拳龍池の南側に又一つ門があつて、「東照宮、金地院、けあげ大津行電車近道」と刻した石が立つてゐる、それを潜ると右側に土堀がつゞいてゐて、東に面した正門があり、そこにも石標が立つてゐて、「史蹟及名勝、金地院」と刻してある。此の寺の本堂は伏見城の書院を移したもので、小堀遠州作茶室八窓軒と共に國寶になつてをり、外に鶴龜の庭と呼ばれてゐる庭園も遠州の意匠と傳へられ、天正年中に明智光秀が建てた明智門など、云ふものもある。上田氏の邸は此の院内にあるのだけれども、入口は別に、その正門の少し手前に格子造りのくゞりが附いてゐて、そ

ここに表札が上つてゐる。くぐりを這入るとひとすぢの細徑が杉の植込の間を奥の方へ曲つて行つて漸く玄關に達する。下駄がたくさん脱いであるのでこゝに違ひないと思つて案内を乞うたが、誰も出て来る様子がなないので、私たちは中へ上つて行つた。と、左の方へ廊下がついてをり、その邊の部屋には人氣がないので、なほ構はずに奥へ進むと幕の張つてあるところへ出た。途端に髪を平べつたくリボンで頭へくゝりつけた。露芝の模様のある緋の單衣を着た夫人が幕をかゝげて私たちの方を見、山内さん、谷崎先生がお見えになりましたと云ふ。それから直ぐに山内さんの母堂の榮子さんが見え、只今ちやうど京子の小舞が濟んだところでございます、是非見て戴きたうございましたのに残念でございましてと云ひながら、幕の向うの會場とおぼしい廣間へ導いてくれた。

此の廣間は疊數十疊ぐらゐであらうか。後で聞いたところに依ると、

此の家は金地院の所有に属するもので、嘗て橋本關雪が銀閣寺のほとりへ移る前に住んでゐたことがあり、そのうち上田氏が、もう十年餘も借りてゐるのであると云ふ。そして此の廣間の建物は、もと桃山城内の毘沙門堂であつたとも云はれてをり、それを金地院が此處に移して座敷風に造りかへたのであると云ふ。だから正面の、もと内陣であつたらしいところに床の間や違ひ棚が出来てゐるけれども、太い角柱、高い天井、大きな瓦燈窓等々の工合がどうしてもお堂の感じであり、縁側の一部には今も上げ格子が附いてゐるのである。そして、昔階段が設けられてゐたであらう階隱はしかづしの間に、勾欄のついた露臺のやうな床張りが出来てゐて、それが庭の池の中へ突き出てをり、その床の上に毛氈を敷いて見物の人々が坐つてゐた。つまりそこが観客席になつてゐて、お堂の内部に當るところ、廣間の方が舞臺になつてゐるのであるが、廣間につゞく小座敷のもう一つ隣の部屋が樂屋に充てられてゐる。